巻頭言

技術力発揮の好機を迎えて

理事　藤村　実

昭和40年代に大阪千里丘陵において、万国博覧会が開催された時には、阪神地域で活発な関連事業が実施され、社会資本の急速な整備を見ました。当公団の現在供用されている路線も、骨格がその当時に形成されております。

しかし、二度にわたるオイル・ショックや、これにともなう総需要抑制、或は国家財政の再建等の流れの中で、その後は公共事業も低迷を続け、関西の地盤沈下が心配されるようにさえなっていました。

昭和62年の新春を迎え、ようやく関西地方には陽が当りだしたというか、順風が吹き出したような感があります。まず多年の懸案であった関西国際空港がいよいよ着工の年を迎えました。これにともなう周辺整備事業も、順次活況を呈することになるでしょう。さらには、国際花と緑の博覧会の開催、京阪奈丘陵における関西文化学術研究都市の建設、明石海峡大橋の着工と、ビッグ・プロジェクトの花盛りといった情勢です。

わが公団の湾岸線の建設も、これに合わせて、いよいよピッチを上げて参りました。政府の内需拡大の方針を受けて、予算も大きく伸びて来ております。

また環状線の渋滞を解消するために、是非とも建設を必要とする第二リングについても、淀川左岸線の建設に着手することによって、将来への展望が開けて来ました。

京阪神の三都市を結ぶ、都市高速道路のネットワークを作り上げる問題も、京都市内の調査に引き続き、淀川右岸の都市高速道路の調査が、本格化することにより、大きく前進することになってきました。

どれをとっても、大きな問題であり、これらの事業を推進することは、容易で

はありませんが、道は我々の前に大きく開けております。

昔から大事をなすには、「天の時、地の利、人の和」を得なければならない、と言われております。湾岸線の建設を急がなければならないため、予算が伸ばされるということは、天の時が到来したと言えるでしょう。著しい交通需要に対応して、路線を次々に伸ばさなければならないということは、地の利がそのようにさせていると見ることも出来ます。最後の人の和については、申すまでもなく、我々が一致協力して、緊密なチームワークの下、持てる力を最大限に発揮することが、従来にも増して強く求められているということです。

ただその場合に、今までつちかって来た公団の技術力を、十分に活用して行かなければなりません。日本でもトップクラスであり、世界でも有数と言い得る構造物が、建造を待っております。

この技報も、回を重ねて第6号となりました。次々に直面する新しい問題に、如何に対応して来たかという歴史を物語るかのようです。営々として築き上げて来た技術力を、今ここに発揮する好機を迎えて、決意も新たに前進しようではありませんか。